

Title	貝殻のほぼ全体を生きたマガキ(軟体動物門, 二枚貝類)で被われたヨメガカサ(軟体動物門, 原始腹足類)の生貝
Author(s)	久保田, 信
Citation	くろしお (2002), 21: 9-9
Issue Date	2002
URL	http://hdl.handle.net/2433/188188
Right	© 南紀生物同好会
Type	Article
Textversion	publisher

貝殻のほぼ全体を生きたマガキ（軟体動物門、二枚貝類）で 被われたヨメガカサ（軟体動物門、原始腹足類）の生貝

久保田 信

Shin KUBOTA : A living *Cellana toreuma* (Mollusca, Archaeogastropoda) with its shell mostly covered by a living oyster *Crassostrea gigas* (Mollusca, Bivalvia)

日本では北海道から沖縄沿岸の潮間帯に生息するヨメガカサ *Cellana toreuma* (REEVE, 1854) において、その笠型の貝殻がほとんど見えないほどにマガキ *Crassostrea gigas* THUNBERG, 1793 の生貝で被われた成貝を、愛媛県松山市三津浜港の岩壁で 2002 年 6 月 8 日に 1 個体採取したので、希少例として報告する (図 1, A)。

このヨメガカサは殻長 43 mm、殻幅 30 mm で成熟可能なサイズに達していた。マガキはヨメガカサの貝殻の前端から後端を 4 mm 越えるまでに成長していた (図 1, B)。そのヨメガカサの貝殻上には、このマガキ 1 個体に加えて、ムラサキイガイ *Mytilus galloprovincialis* LAMARCK, 1819 の幼貝 (ヨメガカサの貝殻後端部に付着した最大個体は前後軸長 15 mm) が前端から後端までの諸処に 16 個体、ヤッコカンザシ *Pomatoleios kuraussi* (BAIRD) が少数個体、および貝殻の前端付近に丈の低いアオサ類が付着していた。

ムラサキイガイの成長は早いので、上記のヨメガカサに付着したムラサキイガイがすべて順調に成長し続けたならば、年内にこのヨメガカサは付着動物の総重量により移動はおろか、基質への付着自体も困難になると推察される。

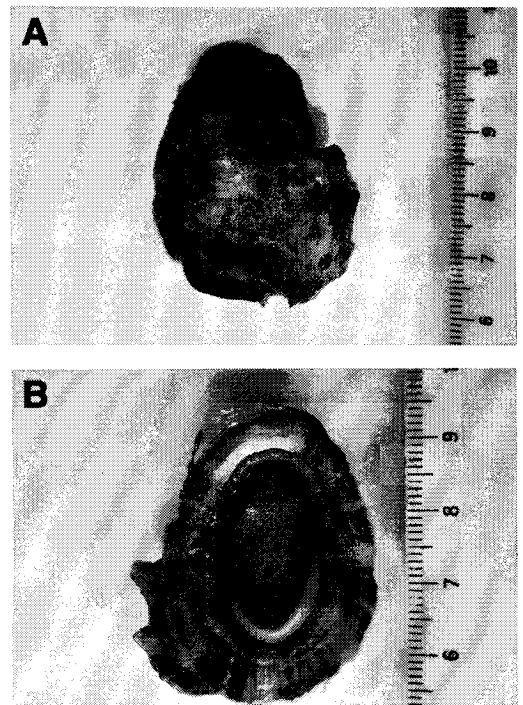


図 1 生きたマガキによって貝殻をほぼ覆われたヨメガカサの生貝 (A: 背面; B: 腹面)

fig1. A living *Cellana toreuma* (REEVE) with its shell mostly covered by an oyster *Crassostrea gigas* THUNBERG (A: dorsal view; B: ventral view)

京都大学大学院理学研究科附属瀬戸臨海実験所
(〒 649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町)

Seto Marine Biological Laboratory, Graduate
School of Science, Kyoto University, Shirahama,
Wakayama 649-2211, Japan